Boehringer Ingelheim

ベーリンガーインゲルハイム
アニマルヘルス ジャパン(株)

プロジンク®効能追加のご案内

謹啓

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、この度、プロジンク®に犬の高血糖及び高血糖に起因する臨床症状の軽減に関する効能が追加されましたので、下記のとおりご案内いたします。

今後とも弊社製品の拡販にご支援賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

謹白

記

I. 新しく追加された【効能・効果】

対象製品	プロジンク®
新しく追加された【効能または効果】	犬：糖尿病による高血糖及び高血糖に起因する臨床症状の軽減

II. 新しく追加された用法及び用量

専門的事項
犬：本剤は1日1回24時間毎又は1日2回12時間毎にU-40のインスリンシリンジを用いて食餌中もしくは食餌後すぐに皮下注射する。初回推奨投与量は体重1 kg当たり0.5～1.0 IUの1日1回投与とする。獣医師は適切な間隔で診察し、症状及び血糖値に応じて投与間隔と投与量を調節する。

III. 新しく追加された使用上の注意

専門的事項
使用上の注意 （専門的事項） （犬及び猫に関する注意） 食餌を摂取しなかった場合には本剤を投与せず、次回の投与について獣医師の指導を受けること。 ②禁忌 低血糖症状を呈している犬及び猫には使用しないこと。 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある犬及び猫には、本剤を使用しないこと。本剤は有効成分としてヒトインスリン（遺伝子組換え）を含有し、その他に硫酸プロタミン（魚由来タンパク質）等の成分を含有する。 重症の糖尿病性ケトアシドーシスの症状を示す犬及び猫の救急治療には使用しないこと。重症の糖尿病性ケトアシドーシス、食欲不振、嗜眠、嘔吐等の症状を呈している犬及び猫には、速効型のインスリンで症状を安定させ、状態が安定するまでは適切な支持療法を行う。 ③対象動物の使用制限 妊娠及び授乳中の犬及び猫に対する安全性及び有効性は確認されていない。 ④重要な基本的注意 他のインスリン製剤による治療歴がない犬の初回投与量は、0.5 IU/kgの1日1回投与が推奨さ

れる。他のインスリン製剤による治療歴がある犬の初回投与量は、他のインスリン製剤による治療経過をもとに、0.5～1.0 IU/kgの1日1回投与が推奨される。
糖尿病のコントロールには基礎疾患・併発疾患の治療及び食餌管理による適正体重の維持が重要である。肥満した犬及び猫では過剰な脂肪組織のためにインスリン抵抗性となり、本剤の効果が十分に発揮されないため、食餌療法等によりゆっくりと体重を減量することが推奨される。
インスリンが最大効果を発揮するには通常数日を要することから、用量調節は通常投与開始から数日後に行う。投与量を調節する場合は、1回の投与量を1頭当たり0.5～1.0 IU増量又は減量すること。
犬において、長期投与に伴い、ときにフルクトサミン値の上昇がみられることがある。その場合は、血糖値曲線を作成し、投与量及び投与回数の最適化を再検討することが推奨される。

以上

Ⓡ登録商標

動物用 糖尿病治療薬

プロジンク®

動物用医薬品 | 要指示 | 劇 | 指定

プロジンク®を使用している飼い主様向け

公式ウェブサイト オープン!

コンテンツの紹介

1 **プロジンクの製品説明**
プロジンクの概要・特徴、投与方法などが閲覧できます。

2 **犬・猫の糖尿病について**
犬の糖尿病、インスリンなどについて詳しくご紹介します。

サイトへのアクセス

スマートフォン、またはパソコンで下記いずれかの方法でアクセスしてください。

1 URLでアクセス
URL:https://www.prozinc.jp

2 検索バーでアクセス
プロジンク 検索

3 QRコードでアクセス

Boehringer Ingelheim

ベーリンガーインゲルハイム
アニマルヘルス ジャパン(株)
〒141-6017 東京都品川区大崎2-1-1 ThinkPark Tower
お客様相談窓口 0120-499-419

PZC2002B06SE_900991

Boehringer Ingelheim

糖尿病のわんちゃんの飼い主様向けガイド

動物用 糖尿病治療薬

プロジンク®

プロジンク®は、動物用医薬品、劇薬、要指示医薬品、指定医薬品です
獣医師等の処方箋・指示により使用してください

犬用

犬の糖尿病とは？

膵臓で作られるインスリンというホルモンは、エネルギー源として糖（グルコース）を必要とする組織や細胞に糖を供給する働きがあります。犬の糖尿病は、通常は膵臓のインスリン産生細胞の減少、機能不全（インスリン欠乏）が原因となって起こります。

糖尿病になると、組織や細胞に糖が供給されず、体が糖をエネルギーとして十分に利用できなくなります。その結果、血液中の糖が増え（高血糖）、尿中に糖が出てくるようになります（尿糖）。

糖尿病になると次のような症状が見られます。

- **水を飲む回数が多くなる（多飲）**
- **尿の量が多くなる（多尿）**
- **摂食量が多くなる**
- **体重が減少する**
- **目が見えなくなる、見えづらくなる（糖尿病性白内障）**

動物病院で糖尿病と診断される際に、診断の決め手になるのは、これらの臨床症状に加え、持続的な血糖値の上昇（高血糖）と尿糖が存在することです。このため、多くの場合で診断の際には、次の3つの値を測定する検査を組み合わせて実施します。

1. **血糖値測定**
2. **長期血糖コントロールマーカー（フルクトサミン、グリコアルブミンなど）**
3. **尿糖測定**

糖を多く含む尿（糖尿）では尿路感染症を引き起こすこともあるため、尿糖の測定だけでなく尿路感染症の検査も重要です。

犬の糖尿病は多くの場合、インスリンを用いた治療によってコントロールできます。

治療によって血糖値が良好にコントロールされるようになると、多くの糖尿病の症状（健康状態、水分摂取量、フードの摂取量、排尿量及び体重など）が改善します。

糖尿病の犬では、自分自身で十分なインスリンを産生することができなくなっているため、多くの場合生涯にわたるインスリン治療が必要になります。また、適切な治療を行っても血糖値を良好にコントロールするのが難しい場合もあります。

犬が**糖尿病と診断されたら、適切な治療を早期に開始する**ことが生活の質を保つためにもっとも有効です

治療開始後、しばらくは症状や血糖値を確認しながらインスリンの投与量を調整します。血糖値を良好にコントロールできるようになるまでには、数週間ほど要することが多いです。

血糖値を良好にコントロールできるようなったあとも、

定期的な受診による健康状態のチェックと、血糖値や長期血糖コントロールマーカーの測定結果に基づき、その都度、治療を適切に見直すことが非常に重要です。

治療の開始

持続的な高血糖症は身体に害を及ぼし、疾患をさらに悪化させます
これを防ぐため、治療はなるべく早期に開始する必要があります

まず、かかりつけ獣医師の診察を受け、詳しい検査を行う必要があります。併発疾患（感染症、炎症性疾患又は内分泌疾患等）がある場合は、これらが糖尿病を引き起こす、または悪化させる可能性があるため、同時に治療していきます。

糖尿病による高血糖をすばやく適切に改善するために、多くの犬ではインスリンによる治療が必要です。また、インスリン治療に加えて、フードの変更や体重管理によって、さらに治療効果が得られる場合があります。かかりつけ獣医師に相談して犬に合った食餌を選びましょう。

なぜインスリンが必要なのか？

糖尿病の犬では、**体内で産生されるインスリンの働きが不足しているため、体の外からインスリンを供給する必要があります。**インスリンを体の外から確実に犬の体内に供給できる唯一の投与法は、定期的な皮下注射です。糖尿病の犬には毎日、皮下注射によりインスリンを供給する必要があるため、飼い主様の協力が非常に重要です。

インスリンの投与

初めは、ご自身で犬に注射する自信がないかもしれません。ほとんどの飼い主様が最初は同じように不安を感じており、これは当然のことです。しかし、注射のやり方はすぐに覚えることができます。かならずかかりつけ獣医師に詳しく説明してもらい、お手本をみせてもらいましょう。しばらくすると、**ほとんどの飼い主様は毎日の注射に慣れ、犬も同じように慣れてきます。**不安な場合は、かかりつけ獣医師に相談しましょう。

インスリンを投与した際にみられることがある**低血糖を起こしたときの対処法についても、事前にかかりつけ獣医師にかならず確認しておきましょう。**低血糖時の応急処置が必要な場合に備えて、ブドウ糖液を常備しておくようにしましょう。

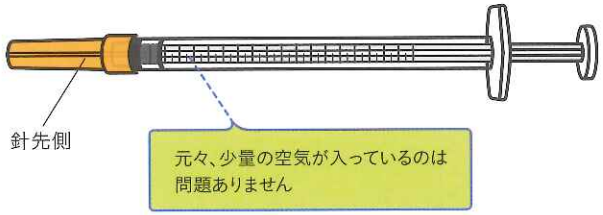
※プロジング®専用シリンジをご使用ください

注射器の取り扱い方法

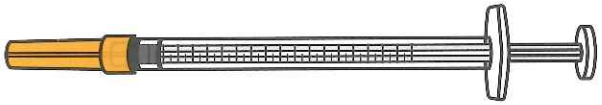
キャップの外し方

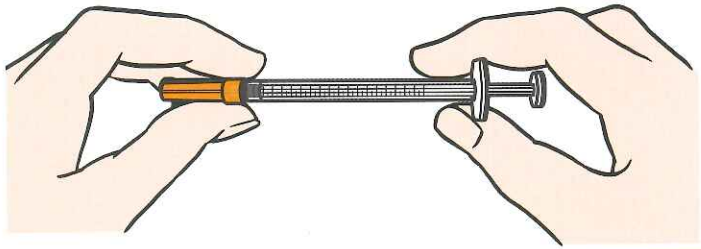
プロジンク®の注射器(シリンジ)は、
針先にキャップが付いています。

針　　先：オレンジ色（透明）・細いキャップ



① 内筒がスムーズに動くことを確認します。

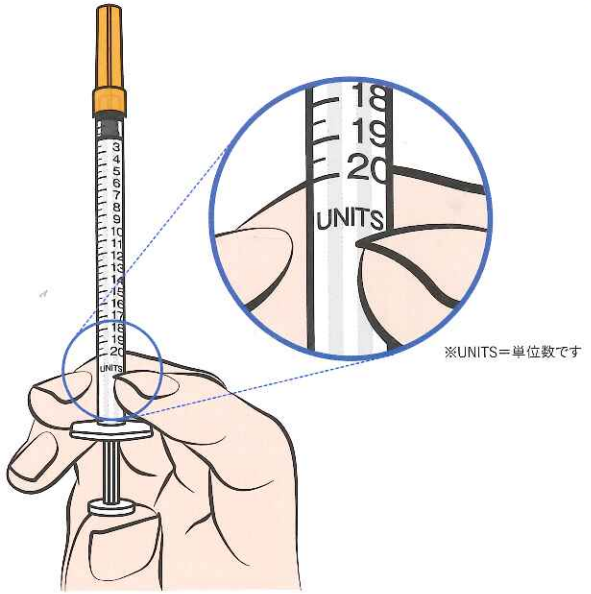




注射器本体と針先のオレンジ色のキャップをしっかり持ちます

② 針先のオレンジ色のキャップを外し、針に異常がないことを確認します。

左右に引いて針先のキャップを外します



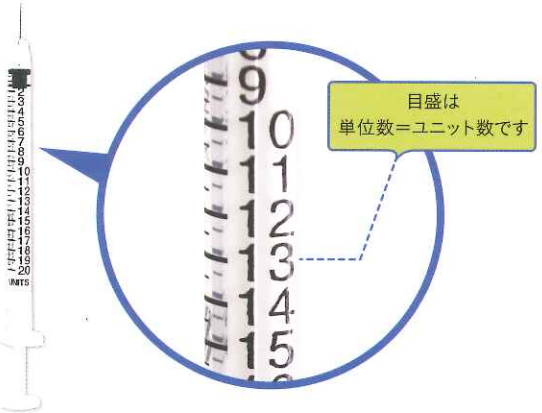
インスリンの投与方法

投与する前にかならず確認しましょう

1. かかりつけ獣医師に、あなたの犬に必要なインスリンの投与量を計算してもらいます。
投与量は、決して獣医師に相談することなく変更してはいけません。

2. インスリンの投与量は、1単位、2単位、3単位・・・とカウントします。(単位＝ユニット(IU))
プロジンク®は1mL当たり40IU含有しているため、
投与には**かならずU-40専用の注射器(シリンジ)を使用**します。
(人間の糖尿病患者用の注射器は、プロジンク®の投与には使用できません)

3. 注射器には
単位＝ユニット (IU) の
目盛が表示されています。



**次のようなときは、プロジンク®を投与せずに
かかりつけ獣医師に相談して下さい**

- フードを食べなかった、もしくは吐き戻した
- 犬の様子がいつもと違う(震える、または元気がない、など)

注射をする前の準備

1. 注射は犬ごとの治療計画に応じて、1日1回もしくは1日2回、行います。
まず、犬がフードを食べ、飼い主様が落ち着いて注射を行えるような時間帯を選びます。1日1回の場合は、毎日同じような時間に、1日2回の場合は、1回目と2回目の間は約12時間空けるようにします。
例：午前8時(1日1回)、午前8時と午後8時(1日2回)

2. 犬にフードを与えます。

3. 犬がフードを食べているとき、またはフードを食べた直後にプロジンク®を投与します。
**プロジンク®は
フードを食べる前に投与してはいけません。**

4. プロジンク®のバイアル(小瓶)と注射器を準備します。

インスリンの投与方法

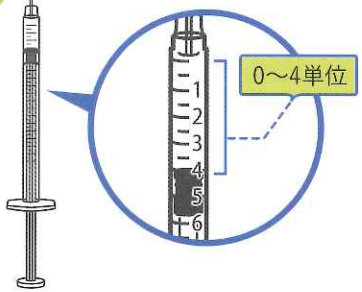
プロジンクの
公式WEBサイトでも
紹介しています

https://www.prozinc.jp/prozinc/dosage/

注射器でプロジンク®を吸い取る

（注射器の取り扱い方法は5〜6ページを参照してください）

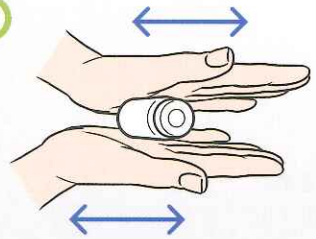
① 例：4単位の投与を獣医師から指示された場合



かかりつけ獣医師から指示されたプロジンク®の投与量［単位＝ユニット（IU）］を確認し、注射器のどの目盛なのかを確認します。

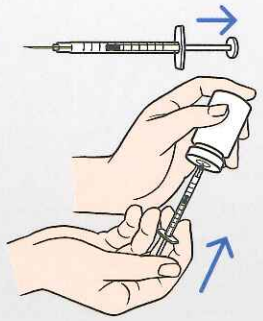
※注射器には単位＝ユニットの目盛が表示されています（左図は4単位＝4ユニットを投与する場合です）。

※毎回注射する直前に必要量を準備します。

② 

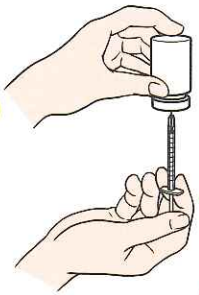
冷蔵庫からプロジンク®のバイアルを取り出し、両手の間でゆっくりと内容液が均一になるまで転がします。

※この時、バイアルを激しく振ってはいけません。

③ 

U-40の注射器を手に取り、投与量の目盛まで内筒を引いて注射器に空気を入れます。

注射器に空気が入った状態のまま針をバイアルのゴム栓（蓋の中央部ゴムの部分）に突き刺し、空気をバイアル内に押し込みます。

④ 

針先が注射液のなかにあることを確認したあと、内筒を引いてプロジンク®を必要な単位よりも少し多めに注射器に吸い取ります。

※ここではまだバイアルから針を抜かないでください！

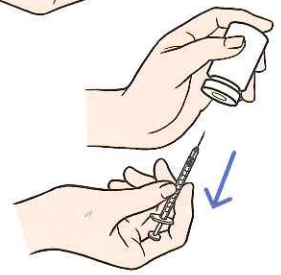
⑤

注射器のなかに気泡ができていないかを確認し、気泡ができている場合は、気泡が注射器の上部（針のほう）に集まるまで注射器の側面を軽くはじくように叩きます。
内筒を押して、注射器の上部に集まった気泡をバイアル内に押し出します。

⑥

内筒を押して余分なプロジンク®をバイアル内に戻し（必要量に足りていなければ内筒を引いてプロジンク®を吸います）、注射器内の注射液を必要な単位の目盛に合わせます。

※この時点で注射器のなかに気泡が残っていないようにします。

⑦ 

内筒から手を離し、
注射器をバイアルから引き抜きます。

プロジンク専用シリンジは接種時の動物の負担を配慮し、細い注射針（29G）を用いております。そのため、薬液を吸引する際には押し子をゆっくりとお引き頂き、シリンジ内が陰圧にならないよう十分にご留意ください。

シリンジ内が陰圧になりますと、シリンジ内に気泡が入ったり、引いた押し子が戻ったりする現象が発生する場合があります。シリンジに気泡が入った場合は、指でシリンジを弾く、薬液を少し押し出す等の方法により気泡を取り除いてください。

インスリンの投与方法

犬に注射します

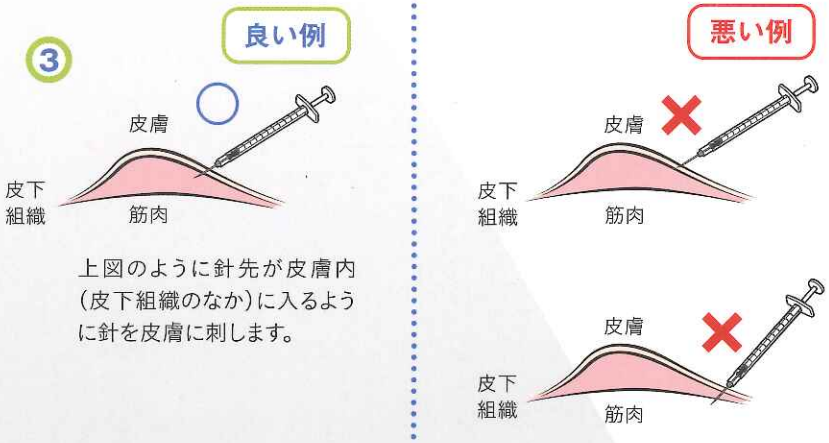
① 犬を安定した静かな場所に移動させ、なでるなどして犬が落ち着くまで待ちます。

注射部位に異常があった場合は獣医師に相談して下さい。

② 犬が落ち着いている間に、注射部位として指定された部分※の皮膚を片手で掴み、軽く引っ張ります。（強く引っ張りすぎないように！）

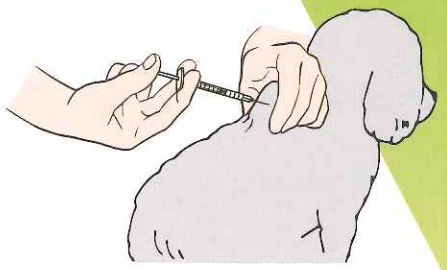
※注射する部位は獣医師の指示に従って下さい。

③



上図のように針先が皮膚内（皮下組織のなか）に入るように針を皮膚に刺します。

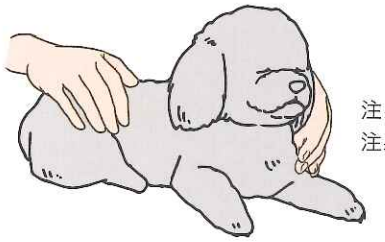
④



内筒を最後まで押し込み、プロジンク®を皮下注射します。

⑤ 皮膚から針を抜き、かかりつけ獣医師に指示された方法で廃棄します。

⑥



注射後は、犬を十分に可愛がってあげて、注射に慣れてもらいましょう。

■投与が終わったら

プロジンク®のバイアルは、**外箱に入れて冷蔵庫内（2~8°C）で次の投与まで保管**します。

・お子様の手の届かない所に、食品との区別が明確になるようにして保管してください。
・バイアルは、ゴム部分を上にして（直立）外箱に入れ遮光してください。
・冷蔵庫のドア部分には入れないでください。

投与量を間違えてしまった時の対処法

■誤って指示された量以上のプロジンク®を注射してしまった場合…

ただちにかかりつけ獣医師に連絡し、注射したプロジンク®の量を知らせて対処法の指示を受けて下さい。必要以上のプロジンク®を投与した場合には、低血糖になる可能性があります。対処方については、事前にかかりつけ獣医師から指導を受けておきましょう。

■注射したプロジンク®が少なすぎた場合、注射の際に不明な量の注射液がこぼれた場合、1回分を注射し忘れた場合…

かかりつけ獣医師に連絡し、対処法の指示を受けてください。すぐに連絡がつかない場合は、犬の状態に異常がなければ次回の注射を通常どおり行います。

例）夜の投与時に注射液がこぼれてしまい注射した量が少なかった場合、もう一度投与したりせずに翌朝まで待って、翌朝の投与時に通常どおりの量を注射します。

低血糖に注意しましょう!

とくに治療を開始してからしばらくの間（プロジンク®の投与量を調節している時期）は、低血糖を起こす可能性があります。

ほとんどの場合、低血糖による症状は緩やかで、血液検査によって初めて発見されることもあります。このため、とくに治療開始時など、プロジンク®の用量を調節している段階では、頻繁に血糖値を検査することが重要です。血糖値が良好にコントロールされている場合でも、治療効果により必要なインスリンの量は減る場合があるため、定期的に検査を行う必要があります。

下記の症状が現れた場合には、低血糖の可能性があるため、ただちにかかりつけ獣医師の診察を受けましょう。これらの症状がみられたら、プロジンク®を投与してはいけません。

- **元気がない、周囲への無関心**
- **異常な空腹感**
- **方向感覚を失っている、視覚低下**
- **筋肉の震え**
- **ふらつく、よろめきながら歩く**
- **痙攣**
- **失神**

低血糖時の応急処置が必要な場合に備えて、常にブドウ糖液を常備しておくようにしましょう。